

第三十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」

広島県優秀作文集

平成二十九年 広島県土木建築局

目次

優秀賞

見えない水への感謝

比治山女子中学校

二年

大村

風歌

魂の水

広島城北中学校

一年

三好

司真

水の意識改革

呉市立郷原中学校

二年

石山

明香里

入選

「自分の行動を見つめ直す」

広島市立大塚中学校

二年

阿波

さくら

藁船に込められた思い

広島城北中学校

三年

平本

大輔

水に感謝する

広島城北中学校

三年

松川

晟士

世界の水問題

広島城北中学校

三年

三浦

颯太

限りある資源、水

広島城北中学校

一年

伊藤

諒太

私が気づいた「水」の役割

比治山女子中学校

一年

武田

万侑

水と生きている

銀河学院中学校

一年

洲本

桜歩

優 秀 賞

見えない水への感謝

比治山女子中学校 二年 大村 風歌

水について、主に水道水についてですが、以前、とても考えさせられた出来事がありました。

去年の春、私の家のすぐ近くにある大きな道路の下を走る水道管が破裂して、アスファルトが大きくひび割れ、道路いっばいが冠水してしまふということがあったのです。

広島駅の新幹線口からすぐの大きなメイン道路です。その日はたまたま土曜だったので交通量も多く、マツダスタジアムの試合に向かう歩行者もたくさんいたのでずいぶん混乱しました。お昼の二ユーヌで映像をみたところ近所の見慣れた道がひび割れて、水が大量に噴き出していました。これまで想像したこともない光景に驚き、私の頭の中も色々な考えが巡って混乱しました。

まず一番に感じたのは、きれいな上水が大量に道路の上流れ出しているのを見て、思った「もったいない！」という気持ちでした。家や学校で「水道水が無駄にせず大切に使うこと」といつも言われているからだと思います。せっかく浄水場できれいになった上水が、飲料水や生活用水として利用されないまま道路に流されてしまっているのは本当にもったいなく残念に思いました。

次に感じたのは、普段意識すらしておらず、ただのアスファルトとしか見えていなかった道の下に、そんなに大きな水道管が走っていたのだという驚き、知らないうちに街の中に上下水道は整備されていて、そこから我が家の蛇口にも水が届いていたのだという驚きでした。それは感謝にも近い思いでした。

二ユーヌを見て、色々な気づきと驚きがありました。しかし、後になつて一番驚いたのは復旧工事の早さでした。アスファルトを掘り返し、破裂した水道管を交換して埋戻すまで、周辺に断水させることもなく、

当日の夕方までに復旧したことに何よりも驚きました。復旧が終わつてすぐ母とその道路を見に行くと、水道局の方がたくさん工事に来られていたことが分かりました。普段接することのないこの方々のおかげで、家の蛇口をひねるだけでもいつも安全なお水が簡単に飲めていたこと、見えない場所には上下水道が整備されていて、気がつかないうちに水の循環システムに支えられていたこと、そしてその循環システムは一朝一夕に容易に造り上げられるものではないからこそ、きれいになった上水を、より大事に使わないといけないと、この時の道路の様子や工事に来られた方々を見て学びました。もちろんきれいになった上水だけでなく、河や海などの水資源も同じくらい大切にしなければならぬと思います。

この時の帰り道、母に日本の上下水道は江戸時代にはもう発達していたと聞きました。なんて恵まれた国に生まれたのだらうと強く印象に残りました。

しかし、先人に残された環境に頼るばかりでなく、これからの世代にも現在の公共の水道設備や水資源を大切に保っていきけるよう、私個人も例えば上水を無駄使いたくないよう、下水に洗い残しものを流さないよう、小さなことから気をつけていきたいと思えます。いつまでも家の蛇口からきれいでおいしいお水が飲みたいからです。

あの日以降、この工事のあった道路を渡る時、アスファルトが真新しくなった部分を見ては、あの日の水道管の復旧工事にとてもたくさんの方が関わっていたことを思い出します。そして、私の家に安心して安全なお水が供給されるまでの間にどれだけたくさんの方々の手がかかっているのかを忘れないように毎日を過ごそうと思えます。

優 秀 賞

魂の水

広島城北中学校 一年 三好 司真

僕にはお気に入りの場所がある。家から徒歩三分のところにある京橋川の川土手だ。京橋川は広島市の街地デルタを形成する川の一つだ。広島は「水の都」とも言われていて、水辺の景観づくりと活用が計画的に進められているそうだ。例えば、水辺にオープンカフェがあったり、陸の玄関口である広島駅前と観光名所にもなっている平和記念公園を結ぶ水上タクシーが運行されたりするなど、川はにぎわいづくりの拠点にもなっている。しかし、僕のお気に入りの場所は、水辺に大木の立つとても静かなところで、たまにジョギングや犬の散歩で通りがかる人がいるぐらいだ。

京橋川では、しじみ漁をしている様子を見かけることがある。しじみは、汽水域と呼ばれる淡水と海水が混じり合う場所だとれる貝で、きれいな水質が保たれている中で、育っているのだと思う。また、「雁木」と呼ばれる川岸から水面まで降りられる小さな石の階段がある。かつては生活物資を運搬する小舟の船着場として使われていたそうだ。この雁木を降りてみると、カニの巣があったり魚が泳いだりしているのを間近に見ることが出来る。水鳥も気持ちよさそうに漂っている。時折、川風が吹いて、水面がゆれて輝く。僕は落ち込んだり、悩んだりしている時によくこの場所を訪れる。自然に囲まれ、川の流れを眺めていると、とても穏やかな気分になれる。そして、がんばってみようと前向きな気持ち湧いてきて、元気になれる。僕の心にうるおいが注がれる。だから、お気に入りの場所なのだ。

この京橋川の本流は、広島の水道水のもととなっている太田川だ。小学校の授業で習った水道にまつわる詩がある。まど・みちおさんの『水道のせん』だ。水道のせんをひねると水が出る。水道のせんさえあれば、いつ、どんなところでもきれいな水が出るものだというように、と始ま

るこの詩から、二つのことを学んだ。一つは、当り前だと思っていることは、誰かが当たり前をつくっているということだ。普段、日々の生活の中で、当たり前のように、きれいでおいしい水を容易に手にすることができるのは、自然の豊かさに加えて、たくさんの人々が水道事業に携わって蛇口まで水を届けてくれているお陰なのだということである。もう一つは、水が持つ大事な役割と水の大切さについてだ。森に降った雨は、やがて川の流れとなり、農業用水、水道水、工業用水など幅広く利用される。同時に、川に住む生物や水辺の植物を育む。人間の生活を便利で豊かにする役割があるとともに、多くの命にうるおいを与えるものだと思えたことである。

「あの日、体中にやけどを負った大勢の人がこの川にやって来とったんよ。『水をくれ。水をくれ。』言ってる。」

僕のひいおばあちゃんが、一発の原子爆弾によって、僕の住む広島の一帯が火の海となった七十二年前のあの日の様子を語ってくれたことを思い出した。身近に流れる川が、まさに命につながる魂の水をたえているのだということを知った体験談だった。そして簡単に蛇口から放水できていけば、火の海はそれほど広がらなかったかもしれない。簡単に蛇口から水をすくって飲むことができていけば、つなぎ止めることのできた命もあったかもしれない。水はたくさん命を救えるものだと改めて感じた。

僕のお気に入りの場所から川の流れを眺めると気分が落ち着き、元気になれるのは、命につながる水の持つ力のお陰なのだと思う。この穏やかできれいな川の流れが、将来にわたって続くように、水の大切さを忘れないでいようと心にちかった。

水の意識改革

梶市郷原中学校 二年 石山 明香里

みなさんは、水を自由に使える事、蛇口をひねれば安全な水が出てくる事を当たり前だと思っていませんか。私たちが生活していく中で最も必要なものは水です。朝起きて、歯磨きをし、顔を洗う。風邪の予防に手洗い、うがいをします。また、生きていく為に水分補給をし、清潔にし、食事をします。これら全てのことには、水は、不可欠です。私たちが思っている以上に人間の体を支え、生活を支えています。このような水ですが、みなさんは、当たり前に使っている水をどのように使っていますか。また、どのような見方をしていますか。私が二年前に祖父から聞いた祖父の体験話をしたいと思います。

「あかり、さめるけえ早く風呂入りんさい。」

なかなか風呂に入らない私に、祖父が強い口調で言いました。

「今これやりたいけえ後で入る。冷めてもいいじゃん。」

すると、祖父はそれ以上怒らずに、ゆっくりと、祖父の体験談を始めました。祖父の生家では、水道がひかれておらず、山にホースを這わせて山水を生活として使っていました。山水は、キンキンに冷えていて、透明度が高く美味しいので、夏は幸せでした。ですが、問題は冬です。祖父の母は、毎日、しもやけがある手で、炊事をしていました。そして山水なので水道のようにホースから勢いよく出ず、チョロチョロと少しずつ出ます。お風呂の時は二時間以上かかっています。そんな不便な生活をしていて、祖父から聞きました。それを聞いてからは、風呂もすぐためられて、温度調節もできて、今の日本の技術は、もっと進んでいるけど、それだけでも幸せなことなんだと改めて考えさせられました。

では、蛇口をひねればきれいで安全な水が出る私たちは、生活に必要な水を得るために多くの苦労があるということを想像できませんか。世界

では、水不足の国がたくさんあります。日本を含む先進国を中心とした国だけ、水道がきちんと整備されていて、いつでも好きなだけ水を使えますが、アフリカなど、途上国のスラム地域や農村部などでは、豊かに暮らす人たちの何倍もの労力とお金を使わなければ、きれいで安全な水を手に入れることができないのです。代表的な例として、水汲み作業があります。これは主に、女性と子どもたちの仕事で、生活に必要な水を得るために、十キロ以上歩くことは珍しくないといえます。二リットルのペットボトルを数本持つと分かるように、それは重く、辛い作業です。先にも述べたように、蛇口をひねればすぐに使えることを当たり前に思っていた私たちには、生活の上での水を確保するために、こんな苦労をしている人たちが世界にいるということを考えたら、水の大切さや、ありがたさの意識が変わっていくはずですが、私の意識が変わったのは、お風呂のシャワーやトイレです。お風呂では、簡単に流すことができるシャワーを常に使っていました。でも母の子ども時代は、浴槽にたまっている湯を洗面器で汲んでは、髪を洗い、体を流していたそうです。では、今はどうでしょうか。どこの家でも普通にあるシャワー。手軽に使える分、浴槽の湯はつかるだけのものとなりそこで、水の無駄が生じます。次にトイレでは、常に手前のレバーをひいてしまいます。手前は大使用、奥は小使用となっているので、本来なら使い分けなければいけないところを、どんな時でも、つい簡単に水量の多い手前をひいてしまいます。これもまた無駄が生じます。こうして一つ一つ考えてみると、どれだけ水の無駄遣いをしていることに気づきます。エコとは、資源だけではなく、水の工口も考えていくことが、当たり前前に水を与えられている私たちの大きな課題ではないでしょうか。

「自分の行動を見つめ直す」

広島市立大塚中学校 二年 阿波 さくら

一度水を汚してしまうと、元に戻すことは簡単ではない。しかし人間は、知らない間に水を汚し生き物を苦しめている。

私は国語の時間に、クニマスが秋田県の田沢湖で絶滅してから、山梨県の西湖で発見されたことが書かれている「幻の魚は生きていた」という説明文を読んだ。

クニマスが絶滅してしまったのは、クニマスの生息していた田沢湖に酸性の強い玉川の水を引き入れたからだ。

クニマスは田沢湖周辺に住む人にとっては、生活や文化に根ざした大切な存在であった。それを、なぜ当時の人は、そんなクニマスを失っても生きようとしたのかを考えた。

当時の田沢湖に酸性の強い玉川の水を引き入れた大きな理由は、一九三四年に東北地方で大凶作が襲い、食料が不足したからだ。ただ、一九三四年ではあくまで計画の段階であり、実行されたのは一九四〇年である。戦時体制真っ只中であることを考えれば、おそらく、人々は自分たちが生きることと精一杯だったのかもしれない。クニマスは見殺しにされたのである。

しかし、私はこの説明文から田沢湖周辺に住む人々の記述からクニマスに対する愛があることに気づいた。

まず一つ目は、「江戸時代より、どれだけクニマスを捕ったかが細かく記録されている。」という所だ。当時の人々がクニマスを捕りすぎないように、節度を守っていることが分かる。

二つ目は、玉川の水を引き入れた場面で「人々の生活のためにはやむをえず、一九四〇年、玉川の水は田沢湖に引き入れられたのである。」の「やむをえず」という所だ。「やむをえず」という言葉は「仕方なく」という意味で、人々はやりたくて見殺しにしたわけではなく、クニマス

のことも決して忘れなかったと思う。

そして三つ目は、「生活の一部であったクニマスに深い愛着を抱いていた三浦さんは、移植先のごこでクニマスが生きていないか、祈るような気持ちで探し始めた。」という所だ。

この三つから、田沢湖の人々のクニマスに対する愛や思いやりを感じた。人々のクニマスに対する愛や思いやりがなければ、クニマスは西湖で生きのびていなかっただろう。

私たちも、このように知らない間に水を汚して生き物を苦しめているだろうか。私は川にゴミを捨て被害を受けるのは川に住む生き物だけではないと思う。その捨てたゴミが海へ流れ、海の上を飛んでいる鳥が誤って食べてしまうこともある。

昔は、戦争という苛酷な時代であったことで人間は生きることと精一杯だったため、やむをえず水を汚して生き物を苦しめていた。だが、そのような経験から環境を大切に人が増え川や海が保たれるようになった。そして現代があるのではないだろうか。

水は人間にとっても生きるために大切なものである。自分たちの身近にあるものだからこそ、つい汚しがちだが身近にあるものだからこそ大切にすることもできるはずだ。そして、「安心して生活したい」という思いが環境を取り戻すことにつながるのではないだろうか。「幻の魚は生きていた」の結論にあったように、どんな時でも人間と生き物の共存を忘れてはならない。

これからは、人間と生き物にとってよりよい未来は何かを考え現代に生きる私たちが実行していくべきである。そして、説明文から学んだ人々の愛で一つの種が生きのびることのすばらしさと、一度してしまっただけを取り返す難しさを忘れず、水を中心に私たち人間と生き物が共存できる環境を忘れず、身近な環境づくりに愛を注いでいきたい。

藁船に込められた思い

広島城北中学校 三年 平本 大輔

川には灯籠を背負った藁舟がたくさん浮かべられ、川の上に置かれたステージから地元の中学校の吹奏楽部が奏でるキレイなハーモニーが聞こえる。毎年、夏に行われるこの祭りには「おかげさんまつり」と呼ばれ地域の人々に長く親しまれている。今では当たり前のように行われているこの祭りも災害に見舞われようとも受け継がれてきたこの町の伝統なのだ。

昭和二十年、それは広島に原爆が落とされた年だ。僕の町、江田島には広島からたくさんさんの被爆者が治療のために運ばれてきていた。原爆投下から約一ヶ月、まだ多くの被爆者達が江田島で入院している頃だ。九月十七日、昭和の三大台風のひとつとも言われる枕崎台風が江田島の小さな町を一瞬にして消し去ったと聞く。枕崎台風は地元の川、長谷川を氾濫させ、大水害を起こしたのだ。また、数日にわたって降り続いた大雨によって山の土砂はくずされ、川の水と一緒に江田島の小さな町を襲った。家を流し、人を流し、被爆者も逃げきれぬまま病院ごと流されたと聞く。この大水害で九十一戸の家が流され、百四十五人も尊い命が失われた。

小学六年生の夏、クラスでこの水害について調べ、発表することになった。放課後、三、四人のグループに分かれ、老人ホームや地域の人の家をまわり、水害についての認知度、実際に被災された方々の体験などを聞いた。体験談などは、あまり思いだしたくなく、泣き出してしまふ方や怒られたりもした。申し訳ない気持ちでいっぱいだった。聞きに行くこと以外にも、学校に来ていただいて体験談を聞くこともあった。ボロボロになった服で見つかったお母さん、仲間の遺体を浜辺で焼いたなどと悲しい話を聞いた。しかし、悲しい話だけでなく、今まで知らな

かったことも聞いた。それは、現在のこの町ができるまでだ。この水害でこの町の人々はたくさんさんの命や家を失ったが、必死で戦い続けたのだ。川岸の補強、砂防ダム建設、家や田畑の再生、そして神楽、祭りなどの伝統文化の継承といったものを協力し、再びこの町を災害に負けぬ強い町へと生まれ変えたのだ。この話を聞いた時の僕たちは、いつものように紙に書きまとめていった。その年の十一月、僕たちは、たくさんさんの保護者の前でこの調査について発表した。自分たちでプレゼンテーション資料を作り、セリフも考えぬいた。昔のこの町の人々のように僕たちは協力したのだ。その努力が校長先生に認められたようで、僕たちのクラスは西区民文化センターで行われた「子ども環境会議」で再び発表することになった。他校に見つめられながらも、僕たちは、この水害についての調査、この町の人々の努力、そして自分たちが今、地域に何をすべきかを考え、一人一人伝えていった。

このような水による災害というものは、自然災害であり、予測することはできないが、起きないようにする、起きたとしても被害を軽減するために対策をすることはできる。また、災害の対策だけでなく、災害が起きた、起きることを子ども達や地域の人たちに伝え、知ってもらうことが必要だと思う。そして子ども達もそれをまた次の世代に伝えていくことができたのだ。だからこそ、今、川に灯籠を背負った藁舟が浮いているのだ。その藁舟には、災害が起きても絶対に負けないという小さな町の小さな荷物が乗っているのだ。

水害から三十三年、昭和五十三年六月一日、江田島の古鷹山で後に広島県史上最も大きな森林火災と呼ばれた山火事が起きた。木々は燃えつきたが、過去の水害を反省に、死者、負傷人を出すことなく、山の再生へと向かっていった。これが伝えることの大切さだ。

水に感謝する

広島城北中学校 三年 松川 晟士

「ありがとうございます。」と、まだ波がたっている屋内の二五メートルプールに一礼をすると時計の針は夜の九時を指している。周りの友達より絶対に水によく触れている僕は、水の大切さは人一倍分かるような気がする。

水泳の試合で、全国いろいろな所に行き、友達ができる。他にも僕は水泳をやっていることでたくさんのお話を学んで、吸収して、それを生かしたりしている。これも全て、泳げる環境にあるからであって、別に当たり前のことではない。しかし、合宿で屋外のプールで泳ぐことがあると、たまに僕たちはこのようなことを言う。

「このプールの水汚いな。最悪。」

普段十分な水、またはきれいな水を得ることができていないアフリカの地域の人々たちはこの言葉を聞くと、どのように感じるだろうか。おそらく、「だよね。この水汚いよね」とは思わないと思う。ならなぜこのようなことを言ってしまうのだろうか。それは、日本では、きれいな水が蛇口から当たり前のように出てきて、その水で料理をし、その水を飲んだりすることができるからです。だから、少しでも汚い水と触れるだけで、あのような発言をしてしまうのだと思う。

実は今日、蛇口から出てきた水を飲むことができる国、つまり水道水を飲めることができる国は、世界でたった十五の国しかないのです。つまり、今わたしたちが置かれている環境は、「当たり前」ではないのです。

その「当たり前」はいろいろな人によって保たれています。雨や雪が川を流れ、ダムに貯められ、浄水場へ届けられます。そこで、汚れやゴミを取り除いて消毒し、二四時間、三六五日休むことなく、安心して飲める水をつくれます。まず、そこで働いている人。次に、さまざまな過

程で定期的に水質検査をして、水道水の安全性を確認している人たちです。この人たちには、もちろん感謝しなければなりません。しかし、「当たり前」なきれいな水を保っているのは、私たちが自身でもあるのです。お風呂でシャンプーやリンスの量を考える。ごみ出しのルールを守る。家の前の側溝や、路面の清掃をする。「ミミを用水路・川・海に流さない。」このようなことが「当たり前」を保つ大きな一つの理由となっているのです。「そんなことが」と思う人もいるかもしれませんが、一つ一つは小さな取り組みかもしれませんが、みんなが取り組みれば大きな効果が得られるのです。

このような理由から私たちは「当たり前」のように、きれいな水を日常で使用することができているのです。

私たちは今、これが「当たり前」になりすぎていると思います。このことに感謝して、「当たり前」を保つために、一人一人がいろんなことに取り組んでいくことが必要だと思います。

このことを考えると、毎日の「ありがとうございます。」を、もう少し気持ちを込めて言うことができると思います。僕も、毎日きれいな水の中で泳げるように努力し、そして、いい結果が出るように努力していきたいと思いました。

最後に、水は私の生活と切っても切りはなせないものだということも学びました。

世界の水問題

広島城北中学校 三年 三浦 颯太

五年前の夏のある日、とても雨が降った。そのため、川の流れは速くなりたくさんの水が流れていた。次の日、私は驚くべきことを聞くことになった。私の小学校の当時の六年生が川に流れ、三人死んでしまったのである。水により三人の尊い命は失われてしまったのだ。この時私は初めて、水の危険さを知った。普段から何気なくあたりまえのように使っている水で命を失うことになるとは思ってもいなかった。当時小学四年生だった私の水に対する考えが少し変わった瞬間であった。

しかし、私たちは水がなければ生活できない。現代では、さまざまな用途でいろいろな人が水を使っている。だから私たち日本人はあまり水のありがたさなど感じてはいないと思う。しかし、世界中には水をどれだけほしくても得られない人や、汚い水を使わざるをえない人がたくさんいる。これが水についての一番の問題点だと思う。きれいな水が得られないということは生死にも影響してくると思う。しかし世界には飲めるほどきれいな水はそんなに存在しないのである。やはり申告な問題だ。

そんな時代の中でこの深刻な水問題に立ち向かっている人を私は知っている。一年前に英語の授業で水問題を扱うときに紹介された日本人である。その日本人は水不足の村を訪れ、雨水を貯水するシステムを導入したと説明された。他にも井戸を掘ったり、汚い水をきれいな水に変えるシステムを導入したりもしたらしい。そのため、その村の水不足は少し解消されたらしい。とても立派で誇らしい話である。その話を聞くだけで私はその日本人を尊敬できた。なぜなら、水の豊富な日本に住んでいながらも、自分に関係のない水不足な村へ自分の足で行き、救助するというのはよほど心がきれいで親切でないといけないからである。正直、その当時の私も今の私も進んで自分の足でその日本人のようなことをしようとは思わない。しかし、当時の私にはその話に関心を持ってただ

けで少し賢くなったような気がした。なぜなら水不足問題を解決するためには、まず知ることが大事だと思ったからである。もし、その日本人のような人が世界中で現れたら、世界の水不足は解消されると思う。そのため今、世界ではどのような問題が起き、どのように解決しようとしているかを知ることが第一歩だと思う。小さな一歩ではあるが、水不足の問題だけではなくさまざまな問題において「知る」ということは本当に大事なことだと思う。

このように、水は普段の生活で絶対に欠かせないものであり、水には人の命を奪う危険性や世界中での水不足などさまざまな問題点がある。それを解決するためには、まず関心をもつことが大切で、人類の一人一人が水について深く考えることが必要であると思う。そして、人類の一人一人が自分のことのように考え、地球規模で協力していく必要があると私は考えた。

限りある資源、水

広島城北中学校 三年 伊藤 諒太

僕は広島に住んでいる。広島と原子爆弾は切っても切れない関係にある。小学校の平和学習で、心に残っていることがある。それは、被爆しながらも、浄水場に駆けつけた水道局の職員堀野九郎さんの話である。堀野さんは、壊れたポンプを必死に修理した。そして被爆の六時間後の午後二時ごろ、予備の送水ポンプの運転が開始され、夕方から一日四万三千立方メートルの給水ができるようになった。この一人の職員の行動により、広島市全域での断水は避けられ、そして広島の水道は百二十年近く止まっていない。

このように、日本では水道局の職員の努力もあり、飲める水・安全な水が水道から出るが世界ではそうではない。水道水が飲める国は百九十六ヶ国中、日本・ドイツ・フィンランド・南アフリカ・オーストラリアなどの十五ヶ国しかない。その他の国で水道水が飲めない理由は、僕が調べた中で三つある。一つ目は、国土が広いのでその分水道のインフラ整備が大変。二つ目は、日本のように高度な上水処理をするにはかなりのコストがかかるので、それらの国では水道設備を整えるよりも安全な水をペットボトルにして売る方がコストが安く済むと考え、あえて水道設備を導入しないから。三つ目は、水道自体がないという国がある。そういった国は、井戸や川の水を汲んで使用している。

しかし、蛇口をひねっただけで簡単に飲める水が出る日本よりも、苦労して汲んできた方が水のありがたみを知っているのではないかと思っただ。僕は、蛇口をひねったら水が出る環境に住んでいるので、風呂に入っている時や、歯磨きをしている時などに水を出しっぱなしにしまっている。母も食器を洗う時に水をだしっぱなしにしている。ある資料によると一人が一日に使う水の量はリットルペットボトル百二十五本分である。また、広島市・府中町・坂町で一日に使われる水の量は

マツダズームズームスタジアム〇・七杯分である。とんでもない量が一日に使われていることがこの資料から分かる。こんなに大量の水が使われているのに、もし、水道が止まったら大変なことになるなと思った。

僕は、実際に水道が止まったという経験はない。しかし、母は平成三年九月の台風十九号の時、住んでいた所で一時水道が止まったという体験をしている。ペットボトルの買い置きもない、浴槽に水が無い状況で、とても怖い思いをしたそうだ。そして、水が出た時の喜びと、また水道が止まるのではないかとという不安を味わったそうだ。何日かは、水のありがたみを実感していた母も、しばらくすると、水の大切さを忘れ、以前のように当たり前のように水を使っていたそうだ。もし、自分が母と同じような体験をしていたらどうだろうか。

水は、限りある資源である。自然の中で姿を変えながら循環しているので、雨さえ降れば、無限のように思われがちだが、僕たちが飲める水は、雨が降ってダムにたまった水や川の水だけだ。もし、雨が降らない時期に水を無駄遣いしてしまうとダムの水がなくなり、水不足になってしまう。そうなる困るのは、僕たちだけではない。植物や動物にも多くの被害をもたらす。水は地球上のすべての命を支えているのだ。水のありがたさを知り、無駄な使い方をせず、節水を心掛けていきたいと思う。これからは、家族同士でお互い声を掛け合いながら、水を大切に生活していくことにしたい。大事なのは、地球の命を佐々えている水を大切にすることが大切である。

私が気づいた「水」の役割

比治山女子中学校 一年 武田 万侑

私たちは、じゃ口の水をそのまま飲むことができます。そして、その水で、洗たくもすることができます。さらに、その水で、植物や作物を育てることができます。このように水は私たちの生活にかかせない存在です。しかし、水の役割はそれだけではありません。私は、水がもたらす役割の大きさに、とても感動した経験があります。

二〇一六年の夏、私はイギリス旅行に行きました。イギリスには、「運河」という水路が四九〇〇kmもあります。運河というのは、人や物を運ぶために人工的に造られた水路のことです。私は、今回、ナローボートという細長い船に乗って、運河を渡りました。そこで、イギリスに住んでいる日本人の方が、運河の歴史をいろいろ話してくれました。

運河がつくられたのは、二〇〇年以上も前のことです。今までは、川で物資を運んでいました。しかし川では、運河と違い、自然に形成されたもので、水の量の調整も調整できず、ルートも作れない一方、人工的に造った運河なら、水の量の調整も、水門で調整ができ、ルートも作れる、という面で、産業革命の発展とともに、六四〇〇kmも、はりめぐらされたそうです。一度に大量の荷物を運べる船は、とても昔から便利なものとされてきました。水を持っている『運ぶ力』を、人間がコントロールできるようにした運河は、昔は、石灰や綿製品を運び、イギリスは栄えていきましたが、今はすたれて観光・レジャー用になりました。しかし、イギリスの伝統を守ろうと、今だから、物資を運んでいる人もいます。そして、人の往来が生まれ、パブや宿舎ができるなど、水路とともに町が発展していき、イギリスのシンボルとなりました。そして、運河祭りが開かれるなど、水の大切さの活動も重視されるようになってきました。あともう一つ、イギリスの水の事で成功した例があります。それは、水の清そう活動です。水をきれいに保つと、毎年ボランティア

ア一五〇人が集まって清そう活動をします。その運河の中には、買い物カートや、ビニール袋などが落ちていたそうです。その影響なのか、絶めつしそうな生き物がかえってきたそうです。私は、この活動にとても感動しました。運河は、生き物たちにとっても、人間たちにとっても貴重な水辺なのだと思いました。

水がもたらす役割は、私の住んでいる広島にもあります。一九四五年八月六日。広島では、いつもこの日に、元安川付近で、灯ろう流しをしています。水で、灯ろうを流して、被爆者の心をなぐさめ、これからも平和な世の中であってほしいという意味で、水で、灯ろうを運んでいます。私の広島の水の役割は、イギリスの水の役割と違い、被爆者をなぐさめる事に、使っています。

しかし、現在世界中で水不足が進んでいます。地球上の水の量約一三・八六億㎥に対し人類が利用できる水はわずか〇・〇一%しかありません。さらに使える量が地域によって違うため、水ストレスを受けている人が世界に七億人もいるといわれています。水は、いろいろな所で重要な役割を担っていますが、水の使い方にも考える必要があると、私は思いません。例えば、水のだしっぱなしや、お風呂の水を洗たくする時に再利用しないなど、水を大切に使用していません。水は、大切な資源だという事が改めて分かりました。

水がもたらす役割は世界で違います。そして水は、いろいろな役割で使われています。イギリスでは、運河を使って物資を運んだり、水があることによって町が発展していき、広島では、灯ろう流しをして、被爆者の心をなぐさめたりなど大切な役割をもっています。だからこそ、水は、大切にすべき資源だと思えます。

水と生きていく

銀河学院中学校 一年 洲本 桜歩

私達にとって「水」は、なくてはならない大切な存在です。食事・お風呂・トイレ・洗たくなどの日常生活はじゃ口を開けば安全な水がすぐに出てくるからこそ成り立っています。しかし世界では安全な水をすぐに手に入れることのできない国もたくさんあります。私はこれから、世界の国々と水の関係、日本の水はどうやって私のもとへきているかを調べながら考えていきたいと思っています。

世界には日本を入れて十五の国の人々しか安全な水が必要な場所に必要な量を使うことができていません。つまり、世界の十三分の一以外の国の人々は私達のような生活ができていないということです。水が手に入らない人々は、十キロメートル以上の道のりを歩き水をくみに行かなければなりません。そしてその仕事は、働いていない女性や子供の役割になります。そのため、なりたい職業に就けなかったり、教育を受けることができなくなります。このように、水が足りないということだけでなくさんの問題が起きているのです。そして反対に考えると、安全な水を手に入れることが容易になれば水をくんでいる時間、労力を減らすことができます。そして、女性も職業に就くことができ、子供は学校に行き様々な知識を身に付けることができます。このように、安全な水がいつでもそばにあるということは、貧困からぬけ出す一つの要素になるのです。

それではなぜ日本では、水によって困ることがない安全な生活ができていたのだろうか。それは、降水量の違いと様々な設備が整っているということだということが分かりました。日本では、水の源は雨や雪となっています。しかし、雨や雪には空気中の様々なゴミ・砂・空気などが入っているため決してきれいとはいえません。そこで日本では、水道局などで汚れを落としてから私達が使える水になる仕組みになっています。次にどのようにし細かい小さなゴミなどを取っているのか調べまし

た。

まず、取水口という所で川や海の水を取りこみ、沈砂池という所で水の中の砂やごみを沈めていきます。次に残った小さいゴミを取るためにぎょうしゅうざいを注入し、小さなゴミを正確に早く沈められるようにし、急速かくはん池でぎょうしゅうざいを全体に広げます。そして、薬品沈でん池で固まったゴミを沈めます。しかしこれでも、菌やとても小さいゴミなどが残っているため、急速ろ過池で砂の層をつかい取り除きます。そして最後に塩素で菌を消すために消毒をします。そしてできた水は浄水池で貯水された後、送水ポンプで各家庭・工場・学校などに送られていきます。このように日本では、たくさんの方力によって安全な水を飲むことができました、安心して食べ物などを食べたりということができています。

私達は生まれた時から、この生活を当たり前のようにならしてきました。しかし、この作文を通して、当たり前前の生活ができることこそが最大の幸せであることを改めて感じました。じゃ口をひねればすぐにでてくる水をたくさんの方達の知恵や苦労・努力そして自然のおかげで使えています。地球には、まだまだたくさんの方が水がなく困っています。そのことを頭に入れ、自然という当たり前の様に思っている恵みに感謝しながら限りある資源を何百年、何千年と残し、守っていく事こそが私達の時代の役割であるということ強く感じました。